

◎ 自著紹介

西尾正道 著

『がん患者3万人と向きあった医師が語る
—正直ながんのはなし—』

西尾 正道 (にしお まさみち)
「市民のためのがん治療の会」顧問

福島原発事故から3年経過し、日本は『ナンデモアリ』の世の中となっています。原発事故に対する人権を軽視した為政者の姿勢と対応は、近隣のアジア諸国以下とも言えます。こうした為政者の姿勢は、時代錯誤の「特定秘密保護法」を成立させ、権力の悪用により「集団的自衛権」を閣議決定するにいたりました。このままでは日本も徴兵制となるであろう。戦後レジームの終焉と、新たな戦前のレジーム構築がなされているのです。

チェルノブイリ事故後の対応には主に国の命令で軍人が携わり、石棺を作って放射性物質を閉じ込めています。しかし日本では労働者を掻き集め、賃金のピンハネまでして働かしています。今後、100~300年かかる廃炉までの過程で労働力は確保できず、戦争ばかりではなく、原発事故収拾のために徴兵制となるだろうと私は考えています。

また、住民に対しては十分な賠償もなされず、生活や家族の繋がりを奪うばかりでなく、職業被ばくの線量限度と同等で、放射線管理区域の4倍近い年間20mSv（外部被ばく線量）の所にまで住まわっています。これは現行の多くの法律に違反した対応です。さらに帰還を促している見識のなさは国民の健康も奪うこととなるでしょう。

ご都合主義的に後だしジャンケンで被ばく線量限度や種々の規制値を緩和するのでは国民はたまったものではありません。年間5mSv（外部被ばく3mSv+内部被ばく2mSv）以上の区域は強制移住とし、移住を余儀なくされた人達には、日本のような仮設住宅ではなく永住できる住居を用意し、すく同じ仕事を提供したチェルノブイリ事故対応とは雲泥の差です。

また私が40年間関与していたがん医療においては、がんと診断されても放置を勧めたりする馬鹿げたカルト教祖のような医師に騙される患者さんも出ているがん医療の状況にも呆れています。

さらにTPPの問題では、関税などが話題となっていますが、実は最も深刻なのは健康問題です。国は貿易摩擦を避けるために、農薬の規制値は大幅に緩和され、遺伝子組み換え食品も大量に摂取する日常生活となります。これらの化学物質は高い発がん性だけでなく、子どもの神経発達障害を起こす毒性も明らかとなり、自閉症スペクトラム障害（アスペルガー

症候群を含む）、ADHD（注意欠如多動性障害）、LD（学習障害）と診断される発達障害の子どもが激増している原因となっていることが分かってきました。このため、EU加盟27カ国は、予防原則に基づいた配慮で、昨年からはネオニコチノイド系農薬は規制・禁止が始められ、また遺伝子組み換え食品は禁止されています。これと比較すれば、日本は為政者の出鱈目さと国民の民度の低さが組み合わされた結果であるとしても、将来深刻な健康被害が危惧されます。

がんを含めた多くの疾患は食の生活習慣と関係しています。がん患者の増加は高齢者が増えたからだと言う軽薄な医師もいますが、それだけではなくがん罹患者は若年化していることも大きな要因です。それには戦後の大気中核実験による放射性物質の世界的な汚染や農薬や化学物質も関係しています。

今後は東電福島原発から海洋に流出し続けているストロンチウムなどの放射性物質は生物濃縮され、海産物を食す人間の内部被ばくも深刻となります。食品汚染の実測体制を構築し、そのデータを基に健康被害を分析することが必要ですが、充分には行われていません。戦後の生活の在り方や文明そのものの見直しまで考えなければならない時期になっているのです。

原子力政策を推進することを目的とした単なる民間NPO団体であるICRP（国際放射線防護委員会）の内容を盲信する御用学者や、「がん放置療法」を唱える近藤 誠医師に討論会を呼び掛けても決して応じてはくれません。論破されるのが怖いのでしょう。そのため、この本を書くことにしました。また高齢社会のがん治療において主役となる放射線治療についても知って頂きたい項を加えました。本のサブタイトルには、「賢く生きるために知っておきたい放射線の光と影」としました。今や国民病とも言えるがんについて正しく理解し、『反省はしても後悔はしない』人生を送っていただければと思います。

国際原子力カムラに代表される「お金のための科学・医学」から「国民のための科学・医学」への転換が必要なのです。

『がん患者3万人と
向きあった医師が語る
—正直ながんのはなし—』



旬報社 2014年8月5日刊 定価1400円+税